

陸の夜は星も月も美しい。月見草は夕方花開くとき音立てて花開くという。

だれも知らないシベリアの墓地の、ひまわりよ、萩よ、ききょうとおみなえしよ、そして夜は淋しいであろう牧さんの墓地を守って忘れることなく幾歳霜、荒野に咲きかわり続けているであろう月見草を思う。

墓前に手折って捧げてきた月見草、向日葵、萩、また今年も美しく咲いてくれたことであろうか。

秋風が吹き、枯れ葉が舞い、また冷たい冬が訪れる。

【執筆者の紹介】

現住所 熊本県本渡市本町大字本七五四三

本籍地 現住所に同じ

生年月日 大正十二年四月二十九日

入 隊 昭和十九年十二月六日

満州独立第十四大隊谷隊根本隊

終戦時の居住地 満州昌圖

入ソ日 昭和二十年十二月六日

抑留地 ウランウデ

作 業 伐採

引 揚 昭和二十三年十一月一日

引揚船 英彦丸

上陸地 舞鶴

(熊本県 高瀬 潤吉)

青春時の抑留

岐阜県 今井 琢 郎

昭和二十年八月九日、ソ連と開戦の日、この朝、私は週番下士官として、日朝点呼をとろうとして兵隊たちに近いが、彼らは私に気づかず、しきりにわめき合い、ある者は踊らんばかりに軍歌を放歌して、またある者は大声でわけのわからないことをどなっている。

どうも理解し難い光景に、兵隊の一人に言葉をかけると「日本は米英に無条件で勝ったのであります」と言う。どうも話がうますぎると不安に思っこの話の

出所をつきとめようと思つたが、間もなく副官よりの命令事項でソ連の参戦の事実を知つた。こうなると途端に兵たちは落ちつきを失つた。だが辛うじて点呼はいつもの通り終わった。それから情報収集に私自身も夢中になる、作戰命令も次々と飛び交う。

「敵ハ第一線ヲ突破シ牡丹江付近ニテ激戦中」「我が軍ハ連京線以東ニテ敵ノ攻撃ノ備エヨ」「〇〇砲隊ハ〇〇ニ陣地セヨ」等々。

私たちは内心呆然として、なすすべも知らぬ衝撃を受けたが、だんだんに氣を取りなおして、いよいよ来るものがきたと出動の準備にかかった。

市内の日本人は比較的平静を保つていた。しかし、現地人の態度が急変して、いつ投石や狙撃されるやも知れず、トラックの荷台には危なくて乗れなくなつてしまつた。連絡に不便このうえない兵舎と市街地の交通は自転車か徒歩よりほかなし。

十五日午後二時ごろ、司令部より命令受領の副官が眼に涙を浮かべて営内へあたふたと駆け込んできた。言うまでもない終戦の知らせであつた。非常呼集、部

隊長詔書奉読、官城遷葬、訓示があつて、初めて日本軍が連合国に対し無条件降伏を余儀なくされた事実を知る。慟哭、形容するすべなし。

九月十九日、私たちは安東より奉天に出発することになった。初めは大隊の中から佐藤見習士官と若干の下士官と一個小隊が残留するはずであつた。

当時、私は軍曹で、この残留組に入り、身の回り品を整理して後続する日を待つていた。やがて兵舎を出発する日がきた。なつかしの兵舎を後に安東駅へ、途中東洋紡績の女工さんたちが断髪姿で見送ってくれた。私は不覚にも涙を流したのを今でも鮮明に思い出している。

部隊がある三叉路へさしかかつたとき、突然現地人の警官に行軍をとめられて所持品の点検となる。小刀類は遠慮なく没収された。その上「これから蒋介石と中華民国の万歳を三唱せよ」と言う。全くやり切れない思ひであつた。しかし、敗れたのだから仕方がない、万歳をするにはしたが、みんな手が高く上がらない、声も小さい。ようやくの思いで安東駅に到着する。

夕方の五時ころ、ほかの部隊の兵隊とともに三十八両編成の貨物列車の無蓋車に乗った。そして三日ほど乗って奉天駅に到着、下車、行軍に移る。市街地を行くと両側の建物はほとんど閉じられている。二階の窓からこっそりと隠れるように日の丸を打ち振ってくれる人もあったが、皆、黙々と歩く。すれ違いざま、日本人らしい老人の目に涙がこぼれていたのが忘れられない。

どこかの特務機関要員らしき者が近寄ってきて、兵隊に、これから奉天北陵に集められ、その後はシベリアへ送られるぞと言う。しかし、私たちはそれを信用しようとはしなかった。だが中にはそれを聞いて途中から姿を消した兵隊もあった。

約四キロの行軍の末、奉天北陵收容所に入る。この收容所の給食は余りよくない。私たちは安東出発のとき、持てるだけの食糧を持ってきたので空腹は感じない。しかし、盗難が相次ぎ、一夜のうちにあれもこれも盗まれるから安心して眠ることもできない。

最初の夜は大きな机を並べてその上で一列に並んで

寝た。次の日から毎日のように一個大隊千五百名ずつで收容所を出ていく、みんなの顔は日本へ帰れると喜び勇んで出発して行った。

收容所へ入って五日目、九月二十五日に私たちは奉天駅を出発した。貨車は有蓋車で、内部は上下二段に分かれており、一両に約五十名であった。真ん中にストーブがあり、便所はないので大戸を開けて用をたすのである。北安、瑗瑛を経て黒河への旅は約一か月かかった。

ここまでくると物資も次第に少なくなり饅頭も小さくなってしまった。この收容所では早く着いた連中から作業をしていた。ある者は所内で薪割りをしている。ここで私たちの使役はソ連貨車の積荷下ろしであった。また黒竜江上の船に積荷する作業やドラム缶をころがしての荷積み等をした。荷物運搬の仕事で街へ行くと食物は十分にあった。使役は軽労働であり、帰りには饅頭や餅を買って、あり金全部使ってしまった。

三、四日で黒河を離れることになる。過去、二年間

軍務に励んだ満州とも別れるのだと思うと去りがたい
思いが胸に迫ってくる。

小高い丘を越えて河岸に出る、対岸はソ連領である。
ついこの間まで日ソ両軍が対峙していたであろう、彼
らの陣地跡が、すんだ空気のもとどこまでも広がって
いる。私は満州の黄色い土を一握りしっかり握って別
れを惜しむ。再びこの土にまみえることはあるまいと
思うと酸がうるむ。この思いは恐らく私ひとりではな
かったことでしょう。

黒竜江渡河が始まる。秋とはいえ河には既に氷が流
れてきている。これから来る冬を思うと背筋に冷たい
ものが走る。橋は仮橋である。鉄骨で架けてある、そ
れだけに上下に大きく揺れる。重いリュックを背負っ
て渡る。渡り切ってしばらく河原を歩く。鉄条網の跡、
堡塁の跡、兵舎が間近に見える。建物から人の歩き方
まで、すべて今まで見なれたものと全く違っている。
国境の町ブラゴエシチエンスクである。市街地を通
りぬけて郊外の空き地で露營することになる。ここま
でくると朝夕はめっきり寒いが薪などはない。広い畑

のなかに穴を掘り、まわりに携帯用の天幕を張り、真
中にストロープを置く、ここでは作業はなく二、三日の
露營であった。

十月十五日だと記憶するが、黄昏迫るころ、私たち
は引込線で列車に乗り込んだ。「いよいよシベリア鉄
道でウラジオオ経由で帰国だ」と全員顔も声も明るい。
あと二日もすればウラジオオだと思うと夜もなかなか眠
れない。朝になった。太陽が列車の後尾からあがって
きた。貨車の扉の外を黒竜江が後ろへ流れていく。列
車は西進しているのだ、どう考えても西進だ。だけれも
が東進しているものと思っただけに眼前の景色ま
でが信じられなかった。昨日からの夢は無惨にも敗れ
てしまったのである。西へ西へ列車は走り続ける。

十日ほど走った列車は大きな街に着いた。チタの街
であった。やがてバイカル湖畔を一日がかりで通過す
る。草原、山林と変化に乏しい単純な風景ばかりでう
んざりしていただけに、バイカル湖畔の景色はまこと
にすばらしいものと思えた。

列車は私たちの心情には容赦なく走り続ける。とあ

る夕方、何も知らぬ駅に停まり下車を命ぜられた。一列車千五百名が乗っていたが、その半数は他の地点へ行くことになり、ここで別れた。

私たちはここで一泊する予定だったが、急に先発隊として出発することになった。ここからはアメリカ製の大型トラックに分乗した。夜のこととどこをどう走っているのか見当もつかない。雪だけ次第に深くなってきた。

ある山の坂道で自動車は止まった。夜中の二時半ごろである。この夜は付近の小屋で仮眠した。翌朝、二キロほど歩いて公民館のような建物に入り、パン一片とスープをもらって朝食をすます。

朝食のあと重いリュックを背負って登って行く。風はないが、登るにつれて疲労が加わり落伍者が相次ぐ。登るにつれてさらに小さな部落で二泊する。板の間の仮眠である。みんな折り重なって眠る。うとうとしたと思ったら急に起こされてまた行軍である。長い列車の旅のあと、大型トラックに詰め込まれ、その上の行軍である。みんな疲労の色が濃い。

ガイドラという名の村を過ぎて次の部落のあたりから雪が降り出し、山に入るにしたがって吹雪となる。ガイドラから二つ目の部落を過ぎると風雪はいよいよ強くなり、道を間違えてしまい引き返したりするうち、もう一歩も動けなくなったころ、やっと私たちの入るトランスワリーの収容所が目の前にあらわれた。

トランスワリーは北緯五十度に位置し、ソ連人は地獄谷と呼んでいた。私たちはそこで約三か月ほど生活した。収容所に入り、やっと一息つく。ある者は足の親指が凍傷にかかって白い皮がむけてしまっている。ほとんどの者が鼻が鼻が皮むけてしまっていた。持ち合わせの食糧は尽きてしまい、何もない。このころの給与が一番じめであった。パン三キロを三十人で分配し、塩水だけで野菜の全く入っていないスープを分け合って辛うじて生命を保ったのである。ある仲間が、貴重なお茶の葉をスープの中に入れてくれた。これがせめての野菜がわりであった。

私たちの収容所は山の頂上近くにあった。パン工場は下のもう一つ下の部落にある。そこから金山の鉱石

や食糧、材木を運ぶ索道でパンを送り上げてくれる仕組みになっていた。だが、連日の猛吹雪でとても索道が使用できない。やむなく決死隊を出すことにした。ある伍長がみずからこの役をかって出てくれた。今でも思い出すたびに感謝している。

その伍長が苦勞の末、帰ってくると顔面蒼白、とてもこの世の人とは思われないほどの姿で身震いして声も出ない。早速、皆で駆け寄って、お互いの体温で温め合った。

そんな吹雪のある日、もうこんな状態では生きて内地の土を踏むことはできないと心に決して、藤田良一伍長とともに、私がひそかに隠し持っていた牛缶二個を小屋の中に隠れて手でつまんで食べたときのうまかったこと、あの味は生涯忘れることができない。

吹雪の中を炊事場からほんの少量の野菜の入った塩のスープを運ぶのも大変な仕事だった。吹雪のため足をとられて、あけてしまうことがある。そうなるとパンだけの食事である。栄養失調者はふえてくる。病気のため入室者は続出する。七百五十名の隊員のうち、

三月までに約二割が死んでいった。

苦しい毎日のなかで下の町まで除雪作業に出かけるのは一番うれしいことであった。十五名か三十五名くらいで一隊となつて、歩哨二名に連れられて一泊か二泊程度の予定で出かけるわけだ。夜は二十畳ほどの一室へ私たちを入れておいて自分は踊りに出かける。ソ連人はダンスが突に好きだ。その留守をいいことに、こっそりと町中の民家へ乞食に出かける。

最初、私は今自分たちがどこにいるのか知りたかった。ある民家に入ったら子供が地図を広げて勉強をしていた。言葉は通じないが、片言まじりの手まね、足まねでやっと現在地を知ることができた。ここは北緯五十度ヤンスタ山脈の中であつた。

そんなある日、某伍長と少しきれいな家があつたので乞食に入った。お定りのようにパン、スープ、馬鈴薯など出してくれた。その時、裏口からソ連将校が入ってきた。私は殺されると観念した。しかし、その将校は食べたらずく帰れと言つて立ち去つた。もし性格の悪い軍人だったらどうなつただろうと思つと背中

を寒いものが走った。

昭和二十一年の一月、私の部下の一等兵が医務室で死亡した。そのため折角の正月は柩つくりに変更、板を合わせて釘を打ってどうやら柩らしい形にする。小指を切って近所の戦友に託した。亡くなった者の被服は全部返納しなければならぬので死体は襦袢と袴下だけになる。雪の中に埋める。土中に埋めたくても凍土を掘ることは石を掘るにも似て大変むずかしくてできない。

医務室の入室患者は次々に死んでいく。死体は丸裸にして雪に穴を掘って埋める。そして雪解け頃、ここを最後に発った兵隊によって土中に埋めなおし、花を供えて「日本兵の墓」をつくって帰ったと聞いた。

春とともにトランスワローを降り、ギイドラを経たチャイナゴールスカヤ（人口約二万人）の収容所に入った。炭坑作業をするためである。この町は囚人の町であり、第一号から十六号炭坑まであった。

私たちのラーゲルは第三、七、十五号炭坑へ仕事に行った。収容所より約二キロの道程であった。仕事は

三交代で一番方午前八時〜午後四時、二番方午後四時〜午後十二時、三番方午後十二時〜午前八時まで、一週間ごとの交代である。

したがって今週一番方をやれば来週は二番方である。一番方は昼間働くのだから疲労は余りない。辛いのは三番方である。一番方が一日の仕事が終わってきて夕飯を食べ消灯して眠るころに起きるのである。

それは午後十時ころである。そして飯上げをして夕朝の食事を一度に食べてしまう。結局一日二度食である。食事後間もなく整列ラッパが鳴り渡る。このラッパの響きは全く聞くだに辛い。人間は昼間動物だとつくづく感じる。

午後十二時から働くのにおくれてはならない。衛兵所前で員数点呼を受けて出発。途中刑務所の横を通る。炭坑の経営はもちろん国家であるが、組織系統は炭坑主―カントク（技術者）―組長―組員―日本組長（下士官）―兵隊となっている。

私たちは組長の指図に従い、組長はカントクの指図を受ける。カントクは各作業場に一名宛おり、組長三

名をもっている。炭坑の仕事は地上で働く者と地下で働くものがある。

月例の身体検査で一、二級は地下、三級は地上作業となる。地下作業、一番方、起床午前六時、飯上げ、炭坑内で昼食はとれないので朝昼一緒にあげ、仕事から帰って夕食と、一日二度になる。

一日の献立は大体次の通り、朝、カーシヤ（かゆ）にスープ。昼、フレーブ（パン）にスープ。夜、カーシヤにスープ。カーシヤは麦、高粱のときもあるが、大体えん麦であった。スープは馬鈴薯にミヤーサ（肉）に塩、キャベツである。フレーブは一日地下六百グラム、地上三百五十グラム。この量は恒常的なのではなく、ノルマによって毎日各人の給与の量が異なり一律ではない。

朝昼同時に食べて一時の満腹感を抱いて午前七時、収容所前に五列に整列、人員点呼を受ける。なかなか人数の計算ができないようである。人員点呼が終わって、秋の終りから冬を迎える帰国の日まで毎日毎日とぼとぼと炭坑までの二キロの道を通ったものであ

る。道が凍りついていて、炭坑までの途中に二度も三度もころぶ者がたくさんいた。引率者は日本将校一名と警戒兵二名である。

炭坑に到着し「ワカレ」の号令がかかると、早速はしごをのぼって二階の更衣室へ行き、作業衣に着かえて入坑の装備をする。装備としてはバッテリーをもらわねばならない。日本兵に渡るのは自分たちの前に仕事をしたソ連人の使い古した長持ちしない、もうすぐ電池のなくなるランプが多い。これをナガラランプと呼んだ。

私は組長をしていたので別室へ行き、ナチャニック、カマンシルらと今日一日の仕事について人員の配分等を考えねばならない。更衣室に戻って、だれには何作業と、仕事の分担を言いつける。兵隊は皆、真面目にやってくれた。二十四歳の若い私が三十〜四十歳までの年長者に仕事を命じるのはまことに心苦しい限りであった。

坑口から仕事場まで約二キロほどある。内地のスコップの二倍もある大エンピを持って、斜めの道を坑

木にあたりながら歩く。時に頭をいやというほどぶつけることもある。私たちの働く炭坑は斜坑だ。鋸を打ってある編み上げ靴をはいて石の上を歩くからよく滑る。滑ってころんで頭を打つと頭の芯まで響き、しばらくは失神状態になることも度々あった。

バッテリーは使い古しなので甚だ心もとない。八時間ももたなくて、途中で赤い色になってついに消えてしまう。泣き出したいくらいだ。初めのうちは炭坑の様子がわからなくて困ったが、次第に手さぐりでも上がってくるができるようになった。みんな整列を終わっているとこへおくれたこともあった。また坑内は臭気が立ち込めていて実にはやなものであった。しかし、坑内も全く嫌ったものではなかった。冬ともなるとシベリアの地方は零下三十五度から五十度まで下がるのに、坑内は年じゅう気温の変化がない。地上は零下五十度というのに坑内では汗を流すのが常であった。凍傷に弱い私にとって好都合であった。しかし、坑道は坑内の地下水と泥のため、まるでぬかるみを歩いているようだ。それに人糞も馬糞も混じっているが、暗いのでまるでわからない。全く生き地獄であった。

爆破した石炭をガチャガチャと大きな音がするコンベアにすくって入れるのである。比較的楽なようであるが、天井の低い切羽のため常に腰を伸ばすことができなないので腰が痛くてたまらない。

トロ押し五名、コンベから入った炭車を順番に押して行くのである。これも比較的楽であるが、脱線したら閉口だ。一人では絶対にあがらぬ、すぐ戦友を呼んで手伝ってもらう。日本兵なら四人はかかる。そんなことをしていると次々と炭車がたまってしまう。結局八時間休みなしで働かねばならない。こうなると機械の故障が起きることを祈るばかりである。仕事が休めるからである。

トロ押しは一日百車から百三十車であるから一人二十回ほど五百メートルの坑道を往復する。トロ押しで一日約十二キロ、収容所の往復を含めると一日約二十キロ歩くことになる。しかも食事は二回である。体力の衰えは日に日に増していく。時間がくるといくら仕

事の途中でまさつとやめて上がっていく。また二キロの道のりをノコノコと大きなエンピをかついて帰るのである。途中で交替者と出会う。誰もが今晩の食事は何だとか、パンはどれくらいだとか、食べる話ばかりである。楽しみは食べて寝ることだけで、それ以外は何もない。

坑道をあがり切ると十五メートルの急な梯子がある。地上に出ると日光の直射が実にまぶしい。だがこれでやっと人間に帰れるのです。ランプチカを返納して入浴室に行つて汗を流し、整列して人員点呼を受けて、異状がなければ歩哨に引率されてなつかしの収容所へたどり着くのである。

このような生活が約八か月続いた。この経験から日本人を改めて見直すことができた。どうも日本人はお互いに協力する気持ちがない。仕事をみても能力のある者はよく働いて食べ物を多くもらうように努力する。しかし、一方ではやってもやっても成績の上がない者もいる。ソ連側は人間は同じ能力にみまわっている。だから成績の上がないのは怠惰している証拠

だと言う。

このような収容所などでは、日本人はどんなに自分のためとは言いながら他人のことも少しは考えてやったり協力してやってほしいものと思う。だが、在ソ中は自分自身の生命を守るだけが精一杯であったことも事実だ。

この点、私が満州で味わった体験だが、支那人の苦力の勤勞報國隊を受領したとき、彼らはちよつとしたことでもすぐ弱者をばく。仕事ときたら、全部の者があたかも申し合わせたように働かない。どこかで彼らは連帯感を持ち、通じ合つて、決して抜けがけや、い子になる者は一人もいなく、この点、日本人はまことにはずかしい者が多かつたのは真実である。

その他の抑留中は煉瓦工場、水道工事、建築工事、鉄道敷設等さまざまな仕事を経験した。鉄道工事を町の駅の西方で帰国まで約二千メートルを敷設した。

「地ならし作業」、シベリアは土地も広いが地ならしもいたつて簡単である。道具も少なく貧弱だから幼稚なものである。もっと機械化する必要があると思う。

「枕木運搬」、汽車が要所要所に薪を置いておくのを運ぶのである。貨車より枕木を降ろすこともある。内地の汽車と違って非常に車台が高いので、積載も多く、最初のうちはどうやって下ろしていいのやら戸惑うが、やっているうちに要領を覚え仕事ができるようになってきた。

まず貨車に二本か三本の棒を渡す、そして一本ずつおろしていくのである。一人で持つようなときは担いでおろすこともある。松は軽いが、栗や樫はとても重い。本当に足が折れそうである。日本のように給与がよければいいが、このような食事では重労働はとても無理であった。

「レール運搬」、一本の長さが十五メートルである。六、七人でトロッコに乗せて運ぶ。レールを持ち上げる要領は全員が呼吸を揃えねばならない、非常にエネルギーを消耗する仕事であった。

「砂利おろし」、一貨車二十五トンならともかくとして五十トン貨車にいっぱい入った砂利を出すのは一苦勞であった。貨車の底には開閉扉があり、あければ

一度に線路上にあげられるようになっていた。一度に出してしまわないと凍ってしまつて出なくなり苦勞するのである。線路上にあげた砂利は早く除かなければ汽車が発進できない。こんな作業のときは貨車の二つの車輪がジャマになってならない。鉄道工事の中で、この仕事が一番いやな、つらい作業であった。

その他にコルホーズの作業、飛行場跡の工場建設、パン工場の使役など種々な経験をした。そのうちに仕事はかけ声だけで力を出さない要領のよいことを覚え、できるだけ体力の温存をはかるようになった。

日本兵の墓地はソ連人の墓地のすぐ側にある。私たちの収容所でも時々落盤事故で死亡する者、また発熱で死亡する者、栄養失調で、結核などで死亡者が多数出た。

冬のある日、私の隊のある伍長が亡くなったので、丁重に棺に収めた。私は兵四人と墓地の穴掘りに出かけた。墓穴は一メートル以下は凍ってしまったのでそれ以上は掘ることができない。一時間ほどで埋めて、内地だったら「○○伍長の戦死の地」と書いた墓

標を建てるどころだが、ここでは伍長の墓標は梵と書いただけである。何とも不思議なしるしである。今も伍長はあの地で眠っている。行けるものならぜひ一度尋ねて行ってやりたいと念願している。

月日が過ぎていくうちにソ連人が日本の兵隊は近く帰ると言い出した。しかし、過去に何度も期待をかけ裏切られていただけになかなか信用できなかったが、ソ連人の顔つきに真剣味が感じられるようになり、今度は真実かも知れないと思うようになった。

二十二年の四月十七日、いよいよ出発命令がきたのである。さまざまな出来事を呑み込んでともかく列車は出発した。ナホトカまで。

来たときと帰るときは経験した者のみを知る味わいである。途中で列車が走っているとき、貨車の上にある小窓から一人落ちてしまった。イルターツク付近の山中の出来事である。連絡はしたものと思いが、その後どうなったか我々に知るすべもない。

十日間くらいでナホトカへ到着した。港は復員引揚港として世に現われた。駅に着いて徒歩で海岸に出た。

すぐには収容所には入れず、海岸で霜にさらされ露営だ。春とはいえ、シベリアの地である。砂中に穴を掘って携帯天幕を張って夜をあかす。

先に到着した兵隊たちが板切れを集めて燃やしてしまった後のため燃料は何もなく、町の方へ薪を探していくと警戒兵がマンドリンでおどす。危うくて近寄れない。火の気のないまま一夜を明かす。しかし、中にはおとなしい歩哨もいる。そんなとき、彼らの焚き火で暖をとったものであった。

ここでの収容所の内容は、第一ラーゲル軽労働、第二ラーゲル民主教育、第三ラーゲル復員準備の順であったが、間もなく私たちは第二に入らず第三ラーゲルで復員式をやって乗船となった。全く予想もしない、突然の帰国命令であった。その式にはソ連将校があいさつをした。

「どうぞ皆さんが日本へ着き、そして父母のもとへ帰ったならば、ソ連と日本はお互いに仲良く提携していきましよう」。その後「スターリン万歳」を三唱して、歩武堂堂と乗船場に向かって行進した。船は恵山

丸という貨物船であった。

五月十七日、いよいよソ連領と別れるときが来た。過去の苦しかった労働、恐らく終生忘れることはないと思ひながら船室に入る。そのとき船内のスピーカーで、皆さん、永い間ご苦労さまでした。この船内にはソ連人は一人もおりません。何とぞ安心してくださいとの放送が流れた。その声を聞いて、思わず皆万歳を叫んだ。

初めの一日、日本海は平穏であったが、二日目は大變に荒れて、みんな参ってしまった。飯上げに行くのがやっとであった。三日目になるとはるかかなたにぽつんと島が見え出した。かもめがゆうゆうと飛んでいる。みんな甲板に上がってただ遙かな山々に見入っている。船は舞鶴港に入っている。空は快晴である。新緑の畠山、空の青さ、すべてがなつかしい。これが故国だと思ふと今まで見慣れていた荒漠たる大平原が夢のように消えていく。頬に涙が伝う。草屋根や、電柱や竹やぶが涙にかすんで次第に見えなくなつてゆく。

夕方六時、東舞鶴港に到着、錨をおろす。一夜を船

中で過ごすわけだが、うれしくてうれしくて気が高まつてなかなか眠ることができなかった。

こうして私は生きて帰ることができました。軍隊生活二年、そして抑留生活二年、これらの空白はもうどうしてもとり戻すことはできない。また、帰郷して改めて教員養成所に入って新教育を学ぶのも決して楽なことではなかった。得難い体験をしたとか戦争という特異な状況に身を置いた者の共通の不運といつても、貴重な一時期をむだにした無念さは如何ともしようがない。

それでも私は生きて帰ってこれたのだ、それだけでも喜ばねばならないと思つている。満州で、そしてシベリアの奥地で父母を思い、故郷を夢見ながら命を落としていった戦友たちを思えば生きていただけでもどれほど有難いことか。また私は幸いにも抑留生活二年で終えることができたけれど、今もって彼の地に生死不明の人も数多くあると聞く。

今は亡き戦友の冥福と、我々以上にシベリアの荒野をさまざまい労苦を重ねられた人々に謝しつつペンを置

きます。

【執筆者の紹介】

大正十二年二月二十七日、岐阜県瑞浪市の今井学、

春子さんの長男として生まれる。

昭和十七年三月、岐阜県立恵南中学校を卒業される。

昭和十九年一月、現役兵として中部第二十三部隊に

入営。

昭和十九年二月、満州国三江省勃利の独立戦車、第

一旅団整備隊に転出。

昭和二十年一月、寧安独立歩兵第五八二部隊に転属、

昭和二十年八月、安東第三七八一五部隊に転属、十

五日終戦、時に陸軍軍曹であった。

昭和二十年九月、奉天市北陵にて作業大隊を編成し

黒河を経由して入ソ。

以後西シベリアにて抑留生活を送られる。主として

の作業は伐採、炭坑作業に明け暮れる毎日が続いた。

そこは北緯五十度のヤンスク山脈の山中であったのである。

昭和二十二年五月十七日、ナホトカを出港、二十一日、舞鶴に上陸復員される。

復員後、新教員の講習を受け、教員生活に入られる。

その間、土岐中学校、釜戸小・中学校、瑞浪小、駄

知小、陶小、笠原小学校等を歴任され、昭和五十七年

三月、三十四年間の教員生活を終えて、定年退職され

る。

彼の教え子、その数、千名を超え、多くの人々に慕

われておられる。

現在、全抑協の瑞浪支部の役員として活動中で、大

切な会員のひとりである。

(岐阜県 鈴木 善三)

二 等兵悲話

高知県 岡本 陸

昭和二十一年元旦

それは昭和二十一年元旦の出来事だった。前夜は衝